

会 議 録

会議名	令和3年度第2回山形市総合教育会議
開催日時	令和4年2月1日（火） 15:30～16:00
開催場所	山形市役所3階 庁議室
出席者	佐藤孝弘市長、荒澤賢雄教育長、 無着道子教育委員、白鳥樹一郎教育委員、中村篤教育委員
（陪席）	奥山泰子こども未来部長
（事務局）	伊藤尚之教育部長、新關昭弘社会教育青少年課長、横倉明史図書館長、高橋真枝管理課長
協議事項	協議事項 (1) コミュニティ・スクールについて (2) 市立図書館のあり方について

会議経過

1. 開 会 （高橋管理課長）

2. 挨拶 佐藤市長・荒澤教育長

4. 協 議 （座長 佐藤市長）

(1) コミュニティ・スクールについて

コミュニティ・スクールの現状について、新關社会教育青少年課長より説明。

<意見交換>

【佐藤市長】

それでは、皆様からご意見をいただきたい。

まず、私から意見を述べさせていただく。

いよいよコミュニティ・スクールの制度が実施されることになる。地域の皆さんが学校と一緒に様々な取組をしたり、学校現場の教育に意見を頂いたり、地域行事に子ども達に関わったりということは、これまでも、ある程度は行われてきている。地域によっては活発に行われてきたところもあり、そうした地域については、これまでの活動の延長ということで、コミュニティ・スクールの制度も受け入れやすかったのではないかと。当然、地域によって差があるので、素地がない地域については、コーディネーターの方や教育委員会がサポートしながら、活動

を支援していく必要があると考えている。子ども達を目線で見ると、これから様々な形で人生を切り開いていく力を身に付けていかなければならない中で、小学生、中学生同士だけではなく、地域の人と関わる経験をしておくことが、将来役に立つと思っている。そうしたことのきっかけに、コミュニティ・スクールの導入が繋がればよい。

社会の関わりから見れば、山形は、まだ、大都市に比べ地域とのつながりが残っている方であるが、それでも薄れている部分もある。このコミュニティ・スクールの制度が、地域と子ども達をつながりを取り戻す一つのツールとして運用していきたい。

【無着委員】

これまで学校毎に魅力ある学校づくりが行なわれてきた。その根幹には地域の方や保護者の方の生まれて育ててもらえたことに感謝して、ふるさとを誇りに思う人になってほしいとの願いが込められている。コミュニティ・スクールの設置により、改めて、地域とつながり、地域で支えるということの大切さを実感するところである。今後、さらに、学校、地域、家庭が連携協働した具体的な活動を進めることが可能になると考える。

活動事例を見ると、体験学習や協働作業、共同学習が大変多い。地域の特性や良さを活かした、学校だからこその取組をして、地域と共に歩む子ども達も、地域の中で役割があって、誰かに喜んでもらえるようなことも経験しながら、成長しているのではないかと思う。

こうした制度のしくみづくりには、地域の多様な立場の人がお互いの状況を理解し、知恵を出し合うことが大事である。そして、地域社会の中で子どもがどう育つのか見守り、どう育ってほしいのか情報交換、情報共有を行いながら必要な手立てを話し合うことが求められる。

また、学校の課題に向き合い、変化に柔軟に対応する寛容さなども求められる。以前とは、社会の状況が違っており、委員の方やコーディネーターの方を中心に長期の展望や目標を持ち、子ども達の将来の生きる姿を思いやり、活動の輪を広げて頂きたい。

そして、ぜひ、取組での成果や上手く行かなかったこと、悩み等も、保護者や地域の皆さんに発信して共有して頂きたい。そこから、新たなヒントやアイデアが生まれるのではないか。さらには、子育てや福祉など地域の中の課題等も見えてくれば、学校を核としたつながりの場が、双方向に意味のある場になる。そして、山形市教育大綱の「郷土を誇りに思い いのちが輝く 人づくり」が生きてくるのではないかと強く思う。

今後、山形市として、教育委員会として、サポートが必要な所には心を寄せな

がら、皆でつくり上げるものになって欲しい。

【白鳥委員】

令和4年度中に全ての小中学校に設置になるとのことで大変良かった。以前、コミュニティ・スクール関係の会議を行った時、いくつか課題を挙げさせて頂いた。例えば、学校運営協議会から、校長若しくは市教育委員会に、むずかしい課題が寄せられた時の対応のしかたや実施後の状況については、学校現場や地域の方に丁寧に説明することが大切だということである。今のところ、そういったことをクリアしながら進んでいるので良かった。

また、もう一つ挙げさせて頂いたこととして、既に設置している学校評議員制度との重複を、どのようにしてクリアしていくのかということ。説明を聞くと、学校評議員制度を活用したことで学校運営協議会が設置しやすかったというような声も聞こえてきたということなので、こちらも良かった。

今後の課題で一番大きいのは、コーディネーターの委嘱をきちんと進められるかであり、それが鍵になる。実践例の中にもあったが、コーディネーターが学校と地域をつなぐ大きな役割をしているので、先に委嘱した学校の情報を提供することなどを通して、全ての学校で委嘱が進んで欲しいと願っている。

それから、学校運営協議会で決定したことを、実際に活動を行っていくPTAや町内会、民生委員児童委員など、地域にいる人にしっかり広報活動を行い実行に結び付けて行くことが大切である。努力しながら柔軟な対応をして、山形らしいコミュニティ・スクールを作り上げて欲しい。

【中村委員】

平成の世の中に入り、「開かれた〇〇」というようなことが進んできている。裁判所では裁判員制度、企業では社外取締役、教育委員会教育委員の構成でも制度改革されている。学校においても社会に開かれた教育ということで、コミュニティ・スクールが始まった。背景には、少子高齢化、地方の過疎化、人と人との交流の希薄化などがある。

コミュニティ・スクールによって期待されることは、子どもの面から考えれば、郷土愛が育まれること、学校の特色がつけられること、子ども達に社会性が身に付いて、問題となっているいじめ・不登校対策にも対応できるのではないかということ。

地域社会の面から見ると、子ども達を中心とした明るさ、活気が地域に出てくると地域住民の生きがいが生まれてくる。将来的には、学校規模の適正化など、地域の課題を考える検討の場にもなっていく。さらに、PTAでも、地域全体と協働、連携することによって、より活動の広がりが出てくることが期待でき

る。

ただ、コミュニティ・スクールを推進していく上で留意していかなければならない点がある。限定された参加者から始まっているため、そこをどの様に拡大していくか、白鳥委員からもあったように、広報活動も重要になってくる。

二つ目は、これまでPTAなどは学校応援団という意識であったが、地域の教育をつくる集団の位置付けになっていくため、会議では、時には辛口の意見も求められてくる。

三つ目は、こういった組織は型にはまり易いので、型にはまらない、地域の独自性を尊重し、直ぐに成果を求めず、長期的なスタンスを持って、教育委員会として対応していくことも必要なのではないかということ。

最後になるが、学校の管理者、教職員の方の立場からすれば、このコミュニティ・スクールの制度が始まることで忙しくなるのではないかの心配が出て、多忙化や無理難題が押し付けられるのではないかなど敬遠されることも考えられる。このようなマイナスの意識を払拭するため学校側として改革していくことも求められる。

【荒澤教育長】

コミュニティ・スクール、地域学校協働活動の目的を考えると、子ども達の成長を支えながら、最終的には地域の活性化、地域の創生が大きな目標である。

その目標に向かって活動する中で、成果として、学校に見られる、期待している姿が三つある。様々な課題があり、その課題を乗り越える努力をしていかなければならないと思っているが、最終的に何を目指すのかということを中心にしていきたい。

一つ目は、学校と地域が目指す子どもの姿を互いに共有して、一体となって地域の担い手を育む学校の姿である。言い換えれば、「地域の子ども」という視点を常に持っている学校の姿。

二つ目は、年々子どもを取り巻く環境が複雑化、多様化し、困難化している状況にあり、学校と家庭との連携だけでは解決できない問題が、多々、学校現場の中では起きている。そういった中で、地域の力や知恵、経験を、課題解決のため、積極的に求めていく学校の姿。

三つ目は、地域には様々なことに長けた方がたくさんいる。英語が堪能な方や運動技能が優れた方、習字が上手な方など、そういった地域の人材の活用について話をし、地域の方々が日常的に学校に関わっている姿。

それから、この事業の当事者である子ども達、先生方、保護者、地域の皆様にも期待している姿がある。先生方には、子どもと向き合う時間を少しでも増やして、地域の教材化を積極的に取り組む姿。地域から学ぶ教師の姿と捉えたいと思

っている。地域の皆様の姿としては、先ほど、中村委員から話があった、子ども達を通しての生きがいや新たな喜び等を感じて頂ける地域の皆様の姿である。保護者の姿としては、地域の見守りの中で、さらに、安心感を深める姿を期待している。そして、一番肝心な子ども達の姿としては、信頼できる大人の中で、市長からも話があった、社会性を学び或いは自己肯定感を持ちながら、地域への愛着を深めていく子ども達の姿に期待している。そういった子ども達と大人達を穏やかに育ていくコミュニティ・スクール、地域学校協働活動であって欲しいと思っている。

【佐藤市長】

皆さんから大事なご意見をいただきましたが、活動を形式的なものではなく実質的なものにするということが、皆さんの共通点ではないかと思っている。そのためには、議論することを嫌がらずに、話し合いを実りあるものにして、決めたことを進めることが大事である。白鳥委員から意見があったように、コーディネーターの存在が大事である。現在、16名委嘱されているが、どのような方が選ばれているのか。

【新關社会青少年課長】

教職員を退職された方、民生委員児童委員、PTAの方がいる。その他、現役の会社員の方も委嘱されている。

【佐藤市長】

多様な方が委嘱されているのは、良い事である。その他、ありませんか。

【白鳥委員】

現在、コロナ禍の中で、運営協議会が開催できない状況であると思うが、学校運営協議会だよりなどを発行するなどの工夫をして、コロナが終息したら、すぐに活動ができるような、下支えの取り組みも必要なのではないか。

【佐藤市長】

コロナ禍の中での活動状況はどうか。

【新關社会青少年課長】

現在は、学校に集まることが制限されているため、会議は開催できない状況である。白鳥委員からご意見のあった件について、事務局では、活動している学校の内容を紹介する情報誌を発行し、学校、委員、コーディネーターにお配りして

いる。また、各学校では、学校だよりで、運営協議会の設置状況等を、地域にお知らせしている。

【佐藤市長】

コロナの影響で活動が停滞しているのは、教育現場に限ったことではなく、市の施策全体のことでもある。コロナ禍の中で、私たちがコロナとどう向き合っていくのか、どう付き合っていくのか、市民の皆さんと共に考えながら前に進んで行きたいと思う。他に、ありませんか。

【荒澤教育長】

先程、白鳥委員が話されたコーディネーターの委嘱の件については、現在、51校全ての学校に配置することで動いている。将来的には、運営委員の委嘱の重複なども考えられることから、中学校の学区単位で小学校もまとめた形で、コミュニティ・スクール、学校運営協議会を開催していくような形を検討して行かなければならないと思っている。現在、既に連携している山寺小・中学校、蔵王三小・二中などのような形になっていく。文部科学省もそのような形を推奨しており、全国的にもそのような動きになっている。今後も、随時、情報を提供して行きたい。

【佐藤市長】

それでは、本日、様々なご意見等を頂きましたので、ご意見等を踏まえ、今後の施策を推進して行きたい。

(2) 市立図書館のあり方について

市立図書館の現状について、横倉図書館長より説明。

【佐藤市長】

次に、二つ目のテーマに移ります。それでは、皆様からご意見をいただきたい。まず、私から意見を述べさせていただきます。

市のまちづくり全体、都市機能から考えると、県立図書館も考慮し、市立図書館を考えなければならない。違った特色を持って存在しなければならないと考えている。県立図書館は、蔵書数を誇る図書館として、リニューアルも終え、レストランの充実なども行い、オープンな図書館として生まれ変わった。

一方、市立図書館については、身近な新刊書や話題の本、雑誌等、市民にとって親しみやすい書籍を多く取り入れている。マンガも置いており、子ども達も利用しやすい、敷居の低い、親しまれる図書館としてこれまで運営されてきたと思

っている。

マニャックなものなど様々な企画ができるのも市立図書館だからこそできることである。そうしたところを長所として、より伸ばしていくことが大切であり、今後もそのような方向性で進めて行ければよい。そのため、アイデアや企画力をさらに磨いて行くべきところである。市民にとっては、本を通じて自分の人生などを考えたりする非常に大事な場であるので、運営の充実を図って頂きたい。

【無着委員】

貸出に係る利用者のアンケートを見ると、サービス面や職員の対応の満足度が高く、要望や意見等を真摯に受け止めて、利用しやすい図書館に努めて頂いている。ここ2年は、様々な制限がある中で、苦勞もあると思うが、平常と変わらない運営を行っていただいていることは、大変ありがたい。

講座や読書会等の事業にあつては、休止やオンラインでの参加も出てきているようであるが、中学生が関わることのできる本の福袋の作成など、工夫した有意義な取り組みもされている。継続した取り組みをお願いしたい。

接触をなるべく控えなければならない現状において、絵本の読み聞かせや絵本と遊ぶ講座等は開催しにくい状況ではあると思うが、こちらも工夫をして開催して頂きたい。絵本の読み聞かせは、伝え合う心地よさがある。ぜひ、復活させてほしい。

学校図書館の面では、ここ数年、学校給食センターとの連携で図書給食を行っているが、一度、小学校で実際に体験させていただいた時、普段とは違う子ども達の生き生きとした表情を見ることができた。今後も絵本を通して食を学ぶ機会を増やして頂きたい。

また、学校図書館との連携を、もっと図れないかとも思っている。学校では、図書館は、読書活動のみならず調べ学習や情報教育の拠点になっている。司書教諭の力も借りながら、さらに学習効果を高め、本との出会いを大切に、より身近で楽しい学びの場となるように、指導をお願いしたい。

【白鳥委員】

コロナの感染対策を取りながら、特色ある事業に力を入れていると感じている。将来的に改築等話題になれば、カフェも欲しいなどの要望も出てくるのだろうが、今は、今ある資源を活用して、さらに取り組んで欲しいと思っていることを四つあげさせて頂く。既に今、行っていることである。

一つ目は、やはり、幅広く新刊書を揃えて欲しいこと。特に高齢者にとって読書の楽しみは大きな位置を占める。利用者のアンケートを活かしながら、蔵書を幅広く増やして欲しい。あわせて、高齢者にも使いやすい検索システムの工夫も

お願いしたい。

二つ目は、より地域と関りを深めるために、これまで以上に地域に関する資料の収集、活用、企画展に力を入れて頂きたい。これまでも行ってきたと思うが、山形市の歴史や山形城、史跡などを様々な視点から光をあて、充実させて頂きたい。

三つ目は、無着委員からも話があったが、学校とのつながりを大事にして欲しい。以前、学校現場にいた時の話になるが、小学校4年生の「ごんぎつね」の学習の際、市立図書館からの団体貸し出しの制度を利用して、学級の中に作者である新美南吉氏作の本を何冊かまとめて置いた。子ども達が自由に読める環境をつくっていたことが非常に有効で、先生方も感謝していた。説明では、学校の調べ学習への貸し出し支援もやっているとのことだったので、さらに、そういったことにも力を入れて欲しい。

四つ目は、電子書籍について。子ども達も一人1台タブレットを持つ時代なので、前向きに検討して頂きたい。

【中村委員】

米沢市や東根市の図書館は、近代的な施設になっている。山形市においても、今後、望む図書館像のポイント五つを話したい。

一つ目は、市民の暮らしを支えていくため、様々な市民のニーズに対応する図書館。また、高齢化社会の中で、生涯学習の充実の観点からも高齢者が朝から寄れる拠点となって欲しい。

二つ目は、市民にいきおいを与えるような図書館。分かりやすく、使いやすい、ゆったりとした心地よさが求められ、子どもから高齢者まで、本の楽しさを体験できる空間であること。親子共々楽しめるようなスペースがある、子育て支援ができる機能も、今後、求められる。

三つ目は、電子書籍の話があったが、時代と共に進化する図書館。様々なメディアを取り入れ、デジタル化への対応が求められている。また、広く市民に親しまれる図書館となるため、ネーミングなども考えていってもよい。

四つ目は、コミュニティ・スクールとも共通するが、市民のボランティア、地域のグループなどに、より一層参画して頂くことも求められる。

五つ目は、建替え、移転の場合の話にはなるが、カフェ機能や自習室、レンタルスペースなどで常に期待感の持てる催しものを行っている図書館。シンボリックな商業施設や子ども遊戯施設などと併設した図書館であってもよいかもしれない。そのような発想も今後求められる。

市立図書館のあり方については、単なる限られた視点だけではなく、市長が話されたように、中長期的に、広く山形市のまちづくりの視点で考えていかなければ

ばならない。

【荒澤教育長】

県立図書館があることを考慮した図書館でなければならない、と市長が話された通りである。

そういった視点で見ると、市立図書館のソフト事業は、県立図書館や他自治体の図書館との差別化を意識し、意図的に展開している。「夜の図書館」や「よのなか科」など、両事業とも読書のカテゴリーを超えて、社会問題の解決や人間の生き方、在り方までを対象とした事業となっている。そのような事業だからこそ、参加者の視野、関心の対象も広げ、読書傾向も広げる効果をもたらしている。参加者の年齢にも幅があるとの説明もあったが、異世代間交流になっていることにも価値がある。今後も、この様な事業を大切にして、他図書館と差別化を意識して事業の充実を図り、市立図書館の存在意義をアピールしていくことが望ましい。

さらに「小荷駄のみどり」のような、いくつかのボランティア団体関わって頂いていることも山形市立図書館の良さであり、財産である。ボランティアの皆さんの高齢化も進んでおり、さらなる活性化に努めていかなければならないが、ボランティアの活躍による図書館の魅力アップも期待している。

また、市立図書館は、市民の教養の向上と文化の振興に寄与するだけでなく、市民の課題解決に役立つ情報拠点としての役割が求められている。市民のニーズに応えられるように、図書館のデジタル化を計画的に進めて行かなければならない。

あわせて、マンパワーの充実にも努めていかなければならない。市民からの求める資料の要望も多いことから、レファレンス機能を高めていくためにも、特に、計画的な図書館司書の配置を進めて行くことが望ましい。

最後に満足度アンケートのレーダーチャートでは、職員の対応度が一番高く、職員の意識の高さの表れであり、これも大きな魅力の一つになっている。

【佐藤市長】

現時点で改築等の計画はないが、市立図書館は非常に大事な存在であると思っている。将来的にはまちづくりの視点も踏まえながら、考えていかなければならない。他自治体では、民間の書店などとの連携をしているところもある。様々な在り方が考えられる。

その他、ご意見ありませんか。ご意見がなければ、本日の意見等を踏まえ、今後の市立図書館の運営に活かして頂きたい。

5. その他

<高橋管理課長>

今後についてですが、来年度の総合教育会議についても、今年度同様、年2回の開催を考えている。内容については、改めて、協議し決定していきたい。

6. 閉会（高橋管理課長）